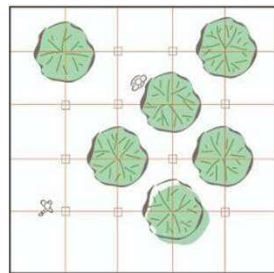
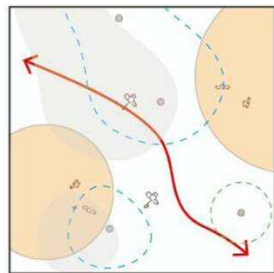




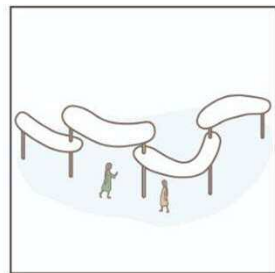
6つの提案のポイント



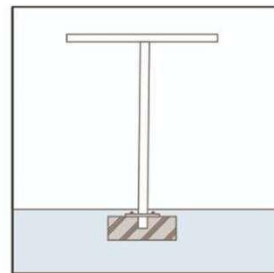
アクティビティの拠り所となるグリッド
グリッドによるニュートラルなプラットフォームを形成し拠り所をつくる



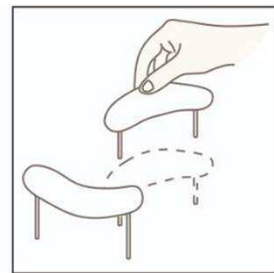
緩やかに動線を整理するおおらかな広場
屋根や床が緩やかに領域を分節することで選択可能で発見的な空間となる



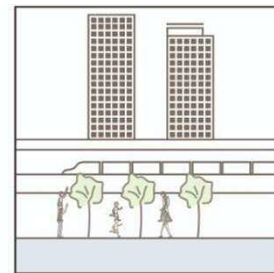
分散/連続両方の利点を兼ね備えた屋根
ユニットが分散、連結することで複雑な駅前機能や暫定的なことの要件に応答



施工が容易で転用も可能なユニット
ユニットは施工が容易な工法とし、工期短縮や次期計画での転用が可能



様々な要件に対応できる柔軟な計画
可変性のある柔軟な設計方式を用い、様々な意見要望を取り入れた広場を実現する



景観や開放感に配慮した構成
高さを抑え分散配置とし、西側の特徴的な景観や空への開放感を継承する

最優秀提案：米澤隆建築設計事務所提案書【抜粋】
※本提案書はプロポーザルを実施にあたり提出されたものであり、本市の計画案として決定したものではありません。
計画案は関係者との会議等をふまえ、決定する予定です。

生まれる土壌を育む西側エリア

高層ビルが高密度に立ち並ぶ東側エリアに比べて、名古屋駅西側エリアは空への広がりがあり情緒的で下町感が残る。

再開発にあたっては、この西側エリアならではの魅力を生かした提案とするのがよいと考える。

本計画では名古屋駅西側エリアを、近代的で合理的に整備され洗練された東側エリアとは対比的に、象徴的な造形や大規模なスケールの構築物で spektakular をつくるのではなく、多様なふるまいの拠り所となるようなおおらかなプラットフォームを提供することで、つくられるだけではない多彩な状況が生まれてくるオルタナティブな場を提案する。

隣接地域から続く東西軸と南北軸が織りなす広場

駅広場は、東西の強い軸を形成する中央コンコースを受け止めるとともに、駅西エリアのまちとの結節点にあたる場所にある。

駅西エリアには椿町・西銀座通商店街へとつながる昭和通りを軸とした東西軸が展開する一方、駅東エリアと同様、南北に走る新幹線に沿って大規模商業施設、名古屋アニメロード（構想）、オフィス、学習塾、飲食店街と多種多様な施設が南北に展開する。

本計画では、中央コンコースからの東西軸および椿町からの東西軸を受けとめるシェルター形状としつつも、南北に細長く展開させることで、南北それぞれのまちへとつなげる。



名古屋駅太閤通出口から主動線に沿って見る。雨を防ぐために屋根が連結されつつも空が見える開放的な場となっている。



タクシー待合から北を見る。高さの異なるクラウド屋根と樹木の織りなす風景が開放性と拠り所を共存させる。

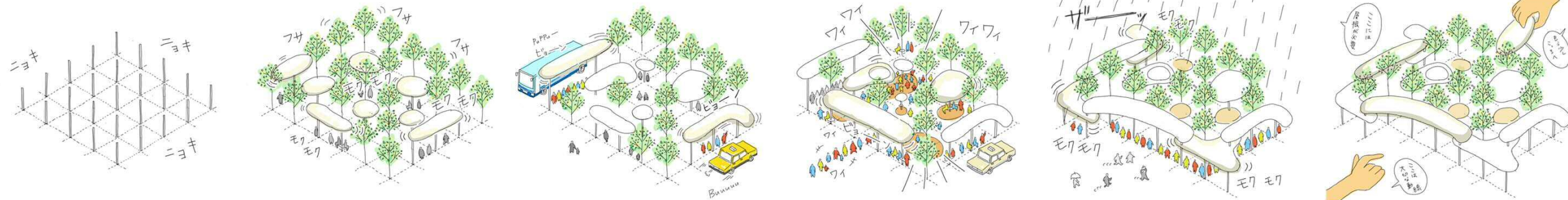


西側交差点から広場を見る。高く配置された屋根が緩やかにまちと広場を接続し人々を迎え入れる。



バス待合から南を見る。サークル床上で遊ぶ子供達とクラウド屋根の下からそれを眺める大人といったように多様な居場所が点在する。

空間構成アニメーションダイアグラム



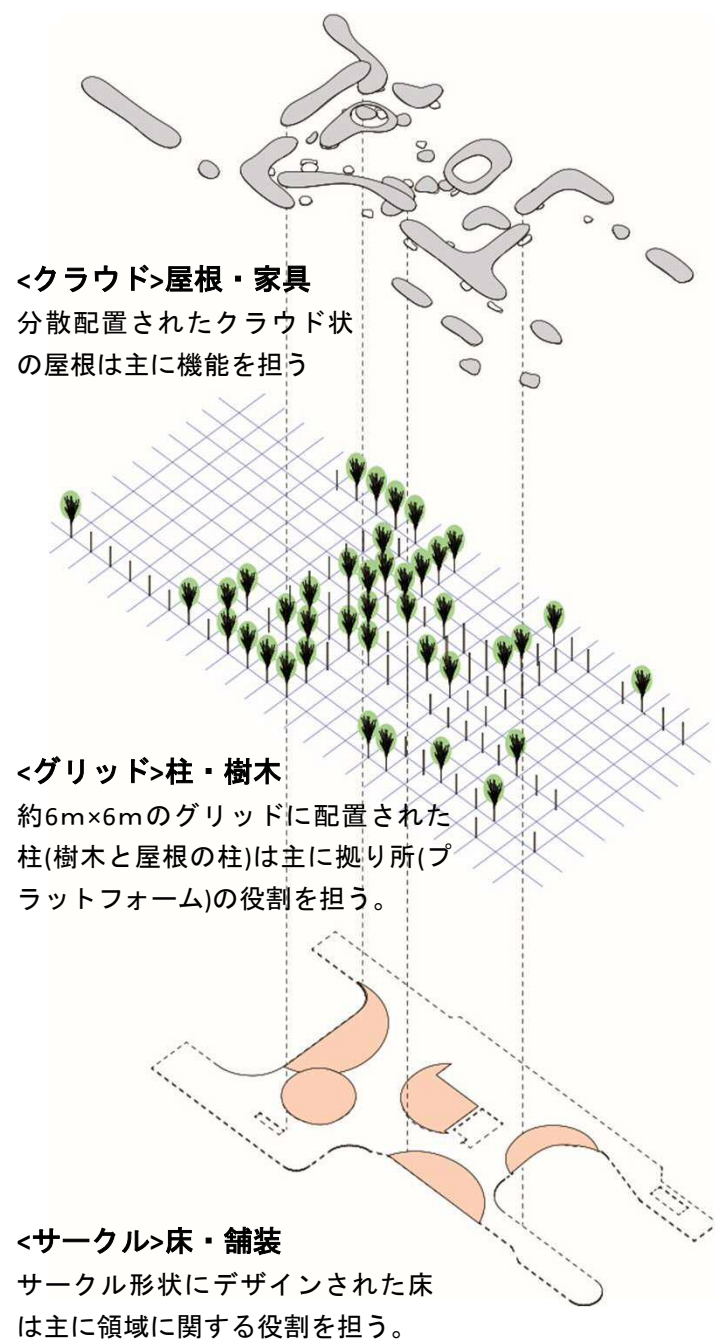
- ① グリッド状にプラットフォームを形成する
- ② グリッドに沿って樹木と屋根を配置する
- ③ その場その場のコンテクストに応じて屋根を変形させる
- ④ 発生するアクティビティに合わせて床をデザインする
- ⑤ 機能要件や雨天時の動線から外周部の屋根が連結する
- ⑥ 利用者、関係者、専門家の意見を基に各要素を調整する

最優秀提案： 米澤隆建築設計事務所 提案書【抜粋】

※本提案書はプロポーザルを実施にあたり提出されたものであり、本市の計画案として決定したものではありません。
計画案は関係者との会議等をふまえ、決定する予定です。

全体構成-屋根、柱、床、異なる論理の重ね合わせ

屋根、柱、床に異なる論理を与え、3つのレイヤーを重ね合わせることで多様な場を構成する。機能、抛り所、領域など異なる観点から各所のコンテクストを引き受けることで、この場所だからこその様相を生成する。



<クラウド>屋根・家具

分散配置されたクラウド状の屋根は主に機能を担う

<グリッド>柱・樹木

約6m×6mのグリッドに配置された柱(樹木と屋根の柱)は主に抛り所(プラットフォーム)の役割を担う。

<サークル>床・舗装

サークル形状にデザインされた床は主に領域に関する役割を担う。

複雑な駅前機能と暫定的な計画に回答する分散連続屋根＝“クラウド型屋根”

大都市における主要駅の駅前広場は、雨に濡れない動線の確保、一般車やタクシーの待合、長距離バスのバス寄せ、地下街へのアクセス、待合せ、イベント開催などの多様な機能を満たすための複雑な場づくりが求められる。

合わせて、多種多様な利用者をはじめ利害関係者など多くのステークホルダーが存在し、提案の柔軟さや可変性のあるフレキシビリティが必要になる。

また、本計画が暫定的な整備であるという点から、施工性やコスト面への配慮、利用後の解体や再利用、移設などへの考えも重要である。

このような条件を引き受け、“クラウド”というシステムを提案する。

雲のような形状の単体の屋根を広場に分散配置し、その場その場のコンテクスト(要望、与件など)に合わせて機能を満たすように大きさや形状を変える。

こうして、空への広がりや妨げることなく、広場を隣接地域から隔てることなく、複雑な機能に部分最適させることができ、計画のフレキシビリティとコストへの配慮を伴う計画とする。

賑わいが点在する開放的な広場

離散共存／賑わいの点在：

利用者は、グリッド柱(樹木も)をプラットフォームとして各自の状況に合わせて居場所を発見する。密集することが懸念される現代において、人々が離散して共存することで、広場全体に賑わいが点在し、さらには周辺地域へと賑わいが波及していくきっかけとなるようなあり方を目指す。

水平方向にも上空方向にも開放的な広場：

アイレベルでは壁面などの視界のを阻害する要素をなくし、グリッド柱の間隔を約6mとし、さらにクラウド屋根の高さを変えることにより、水平方向にも上空方向にも開放的な広場の計画とした。

ランドスケープ計画

特徴的な景観を継承：

交通機能上の利便性が担保される最低限の高さのシェルターとすることで、現状椿町側から見た際に見えるJRセントラルタワーズ、JRゲートタワーおよび東海道新幹線の景観を阻害しない計画とする。

南北に細長いシェルターと新たに計画する森が、ツインタワーおよび東海道新幹線の景観の前景となって新たな太閤口の顔となる。

緑陰広場：

オフィスビルや高層ビルが集積する駅東に対して、小規模な商業施設や住宅が展開する駅西エリアに合わせて、広く大きな床面と大屋根を建設するのではなく、周辺建築のもつスケールを引用してグリッド状に展開した森により、緑陰をつくりだす。

特に暑い名古屋において、緑陰下で涼しく移動または滞在が可能な空間が形成されるとともに、新幹線の視点から見ると、特徴的なシェルターとともに大きな森として見え、新たなシンボリックな景観を形成する。このように大きな構えをとることで、今後の駅前の大規模開発においても継承されうる設えになる。



西側交差点より名古屋駅方面を見る。
JRセントラルタワーズ、JRゲートタワーおよび東海道新幹線の前景となる。



東海道新幹線車窓より西側を見る。クラウド屋根と樹木が前景となり、名古屋駅西側の新たな顔となる。

